

ロシア・ウクライナ間の天然ガス紛争～ウクライナのガス代未納問題～

ウクライナとロシア間の紛争が、この 2014 年にも再び話題となり、連日ニュースに報道された。初めはこのニュースに興味を持ち、新聞記事や、ロシアとウクライナの関係についての本を探して調べていた。調べていると、紛争には天然ガスが関わっていて、しかも天然ガス紛争は今までも起こっていたことを知った。そこで、三度天然ガスの栓を締めるまでに発展してきた紛争が、これ以上繰り返されなくなるにはどうしたら良いのかをこのレポートでは検討する。

はじめに、ロシアからウクライナへ天然ガスを輸出しているガスプロムという会社は、ロシアの天然ガス産業を独占する大きな会社であり、2005 年のガスプロム年次報告では、ガスプロムの天然ガス生産量はロシア企業の天然ガス生産量のうち 85.5 パーセントを占めていた。次点はノヴァテクの 4.0 パーセントと、大きな差があることが分かる。しかしこれだけ大きな会社であるから、社内の権力闘争はとても激しい。「ガスプロムの現経営トップはミレルというプーチン大統領と親しい関係を持った人物だ。ガスプロムの会長(取締役会議長)には、メドベージェフ第一副首相(二〇〇五年十一月まで大統領府長官)が就いている。それだけではない。国が大株主だけに、グレフ経済発展貿易相、フリステンコ産業エネルギー相といった人物が取締役に選任されている」と塩原俊彦氏が『ロシア資源産業の「内部」』(2006、アジア経済研究所出版)で述べているように、会社の重役はロシア政府と直結していると言って過言ではないように思える。ガスプロム株のうち 50 パーセントを超える数がロシアという国の所有となっているため、社長の決定権すらロシア大統領の手の中にあるのだ。ガスプロムを支配すれば、政治資金や情報操作に利益の一部を使えるということもある。対ウクライナに限らず、天然ガスの輸出はロシア政府が全て動かせるということになるからだ。

次に、そんなガスプロムがウクライナに対して設定した天然ガス価格の推移について見ていく。まず 2006 年では、1000 立方メートルあたりの単価 95 ドルであった。2006 年は初めてロシアがウクライナへの天然ガス輸出を停止した年である。この時の紛争は、ロシアが天然ガスの料金を大幅に上げる提案をしたのに対してウクライナが反発したことから始まった。そのため、本来天然ガス料金は 160 ドルとなる予定だった。95 ドルというのは妥協案である。ガスプロムはウクライナへの天然ガス供給を止めたのだがウクライナが無視して天然ガスを抜き取った事件があったのもこの紛争である。ウクライナが欧州向けの天然ガスを抜き取って無断使用したために、欧州へ天然ガスが行かずに大混乱が起こったのである。

続いて 2009 年には単価 360 ドル、そして 2014 年には 485.5 ドルということになっている。2014 年については、4 月にこの価格に値上げしたがそれ以前は 268.5 ドルであった。なぜ値上げがされたのかというと、ウクライナの天然ガス料金の未払額が多額にのぼり、しかも滞納額の一部である 19 億ドルの支払いですら払わなかったために、輸出関税を掛ける必要があるとガスプロムが判断したためである。ウクライナはこのような事態になっていたにも関わらず、欧州委員会の提案していた妥協案である 326 ドルを受け入れる用意があると 6 月 13 日に表明していた。これに対してロシアはというと、対 EU の天然ガス価格である 387 ドルとほぼ同額である 385 ドルにすることを要求している。ウクライナは旧ソ連圏であり、かつては親ロシアの政権であったということも最厚い扱い、それ以外の国よりも大分安い価格で天然ガスの輸入をしていた。同じソ連圏であったベラルーシも、2007 年に石油のことでロシアと紛争が勃発したが和解し、今でも天然ガスを安く輸入することができている。ところがウクライナに対して他国と同程度の価格を求めているということは、ロシアもウクライナに親ロシア国としての特別な待遇を施すのをためらい始めたということだろうか。2003 年末時点でのガスプロム天然ガス代債権額を見ても、ウクライナはダントツでトップであるから、

ロシアが見放そうとしていると考えても無理はない。

だが本来、ウクライナが天然ガス代金をこうも滞納するというのは不思議な話なのである。ウクライナという国は、ロシアから伸びている天然ガス・パイプラインの中継地になっている。そのため、ロシアから中継代というものが入ってきて大きな収入となるはずなのだ。この中継代というのは 2005 年で天然ガス 1000 立方メートルを 100 キロメートル輸送するあたり 1.09 ドルであった。本来ならば、この中継代だけでウクライナは天然ガスの料金を支払うことができるはずだったのである。しかし、ウクライナの天然ガス料金滞納額は 2014 年 5 月分時点で 44 億 5800 万ドルとなっている。これはどういうことであるのだろうか。調べてみると、ロシアのガスプロムとウクライナのナフトガスとの天然ガス取引は、ガス財閥を仲介して行われているらしいことが分かった。ウクライナにあるこの財閥が、ロシアから購入する天然ガスに多額の仲介料を上乗せしてウクライナに売っているという。そのためにウクライナは、高額になった天然ガスの代金を支払うことができず、借金ばかりが膨れあがっていくという訳である。しかも、この財閥の関係者の中にはかつてのオレンジ革命の立役者であるユーシェンコや、ウクライナ元首相のティモシェンコも居るといふから驚きである。国を変えるために散々動いてきた人物達こそが、国の破綻危機に一役買っているというのは信じられないことである。

この財閥をどうにかするというのが、天然ガス紛争を起こさないためには理想的であるとは思うのだが、ウクライナに根付いてきた歴史からして簡単にはいかないと素人目ですら分かる。ウクライナが困窮するような事態にはなるかも知れないが、私はウクライナ迂回ルートのパイプラインを完成させることの方が、あくまでも紛争問題解決のためには近道になると思う。紛争が繰り返されないこと、という面を優先して考えれば、ウクライナのガス代金の未納を防いだり、天然ガス抜き取りが行われないようにしたりすることが大事であると思うからだ。前払い制に移行するのも良い案だろうと思うが、ウクライナには前科があるだけに、それだけではまた天然ガスを無断使用される恐れがある。しかし、五年後の 2019 年には、ウクライナを迂回するルートのパイプラインであるサウス・ストリームが完成予定である。2019 年は、ウクライナとロシアとの天然ガス契約が丁度切れる年でもある。そのため、サウス・ストリームが完成した時にも天然ガス代金の未納問題が前進していなかったのならば、ロシアからウクライナへの天然ガス輸送はストップされるだろう。しかも、そうなったとしても天然ガスの抜き取りは行いようがないし、欧州への供給に問題が発生することもない。ウクライナを除いた他の国にとっては、とても良いことのように思えるだろう。ウクライナを見捨てるということが条件になるが、その上で天然ガス紛争は終わるのだから。だが、ウクライナは天然ガスの三割をロシアからの輸入に頼っているのだが、それを完全に失う自体になってしまう。その時のウクライナは、どうしようもなくなって破産してしまうか、ガス財閥に国を乗っ取られてしまうかの二択であるように私は思う。もう少しガス財閥の存在が明るみに出れば考えることが容易になるだろう。これからの展開も追って見ていきたい。

参考文献

塩原俊彦(2006)「ロシア資源産業の「内部」」アジア経済研究所

塩原俊彦(2007)「パイプラインの政治経済学」法政大学出版局

谷口長世(2014)「天然ガス・パイプラインから眺めた遙かなセバストポリ：エネルギー奥の院を覗く」『世界』(856), 124-132

2014 年 5 月 9 日 AFP 「露、ウクライナに天然ガス代金の前払い要求 6 月 1 日から」

2009 年 3 月 JOGMEC vol.43 No.2 本村眞澄「繰り返されたロシア・ウクライナ天然ガス紛争」

2014 年 6 月 13 日 ロイター「ウクライナ、ロシア産ガス料金で妥協案受け入れ用意」